

内務省期の農政実務官僚と勸農政策の展開

友 田 清 彦*

要約：近代日本における勸農政策の本格的な展開は、明治6年（1873）11月における内務省の創設、および明治7年（1874）7月における同省勸業寮の設置をもって開始される。内務省期における勸農政策展開の担い手となった農政実務官僚のうち、最上層部を形成する官僚の多くは、明治4年（1871）から同6年（1873）にかけて行われた岩倉使節団の米欧回覧、および明治6年に開催されたオーストリアのウィーン万国博覧会に直接関係を有する人々であった。岩山敬義、田中芳男、佐々木長淳、池田謙蔵、関沢明清、前田正名、井上省三などであり、彼らの人的なネットワークこそが、内務省期における勸農政策展開の推進力となったのである。本稿では、彼ら内務省の農政実務官僚に焦点をあて、彼らによって勸農政策がどのように展開されていったのかについて明らかにした。

キーワード：明治農政、農政実務官僚、岩倉使節団、ウィーン万国博覧会

I. はじめに

筆者はかつて、岩倉使節団の報告書『特命全権大使 米欧回覧実記』、同使節団理事官（視察官）の報告書である各種『理事（視察）功程』、および澳国博覧会（ウィーン万国博覧会）事務局の報告書『澳国博覧会報告書』中の、農林水産業に関する記事や報告を分析したことがある（友田、1995：40-54；1996：40-52；1997：37-49；1999a：25-38；1999b：13-27）。岩倉使節団が米欧回覧を通じて得た日本農業に対する将来展望を、ごく単純化して要約すれば、次のごとくである。すなわち、それは何よりも従来の水田・水稻偏重的な農業のあり方を改め、畑作や畜産振興などにより適地適作に努めること、そしてそれによってこれまで原野等の形で放置されてきた土地を開墾すべきであるという展望であり、その際につねに念頭におかれていたのは輸出の振興という視点であった。さらに、その展望を実現するために必要な諸施策として考えられたのが、中央政府の農政担当機関、勸農会社（農業団体・農会）、農学校（農業教育機関）、農業試験場、農業博覧会（博覧会・共進会）の設立、開催、振興などである。このような『米欧回覧実記』の

認識の基礎となっているのは、言うまでもなく、岩倉使節団自身の米欧体験そのものであるが、上記の『理事（視察）功程』や『澳国博覧会報告書』は、その米欧体験を補完あるいは裏付けるものであった。

ところで、筆者の問題関心は、岩倉使節団やウィーン万国博覧会が内務省勸農政策の展開にいかなる影響を与えたかを実証的に明らかにすることである。その際に重要な鍵となってくるのが、内務省勸農政策の実質的担い手である農政実務官僚とそのネットワークであった。本誌第104号に発表した拙稿（友田、2007：13-26）で明らかにしたように、彼ら農政実務官僚のネットワーク形成は、岩倉使節団の米欧回覧やウィーン万国博覧会への参加を通じて行われた。本稿では、このようにして形成されたネットワークを基盤として、彼ら農政実務官僚たちが、内務省期から農商務省期にかけての勸農政策展開にどのようにかかわっていったのかについて明らかにしたい。

本論に入るに先だって、まず図1を見ていただきたい。図1は内務省勸業寮・勸農局や農商務省の農政官僚を中心とした人々のネットワークを、一種の系統図という形で、大胆に単純化し視覚化したものである。網掛けで示したように、これら

* 東京農業大学国際食料情報学部

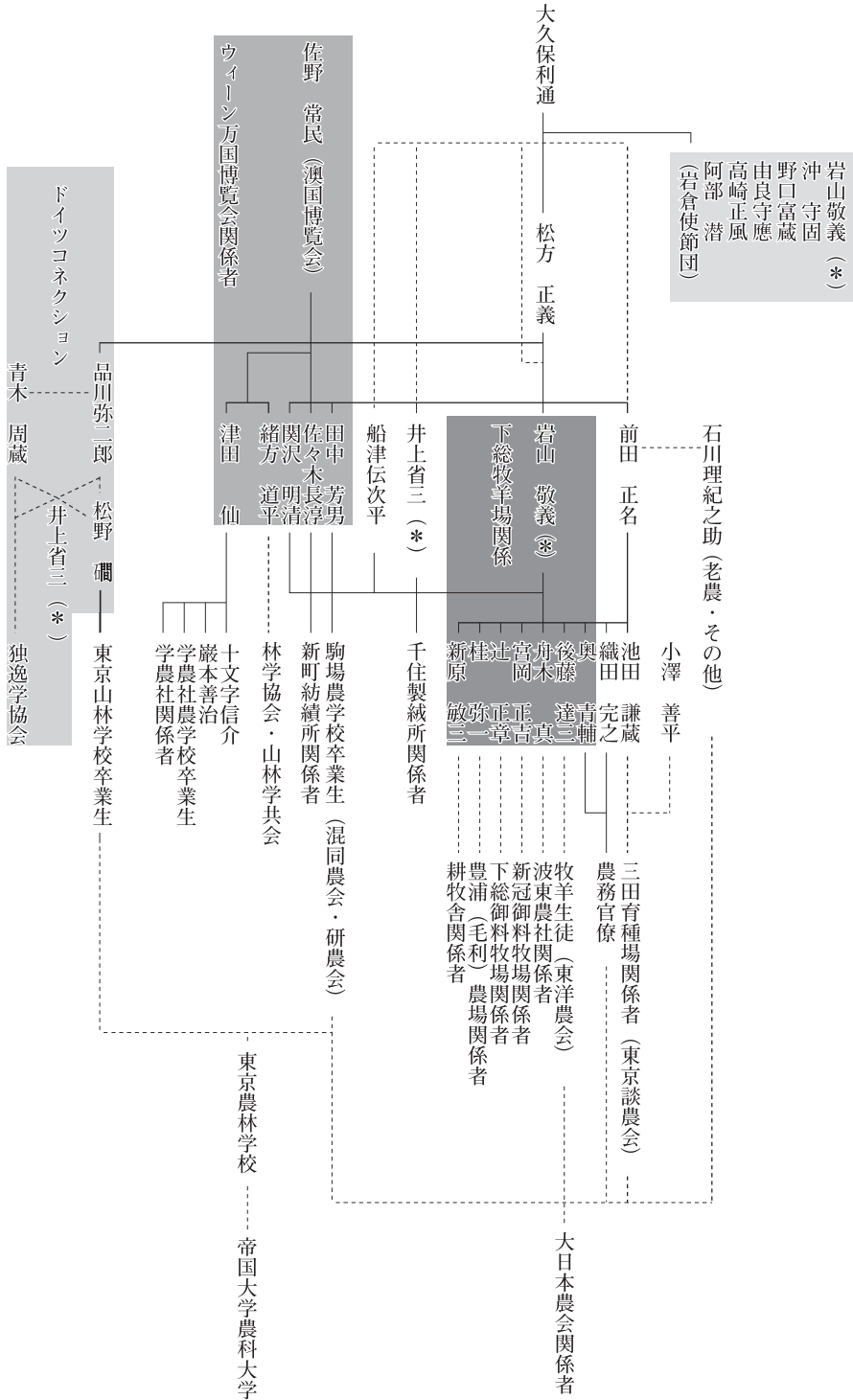


図 1 農政実務官僚のネットワーク

(出所) 友田清彦 (2007: 14)。

(備考) (*) を付した岩山敬義と井上省三は、図示の必要上、二箇所重複して掲載した。

の人々の多くは、いくつかのグループに括ることができる。まず第一は岩倉使節団関係者である。その中で、最も重要なのは、言うまでもなく、自らのイニシアティブで内務省を創設し、殖産興業政策展開の先頭に立った大久保利通その人である。しかし、本稿では焦点を実際に個別の政策展開を担当した農政実務官僚にあてているため、大久保には一切触れない。岩倉使節団関係者は少なくないが、その中で、帰国後、内務省勸農政策に直接に係わったのは岩山敬義のみである。そこで、内務省勸業寮・勸農局における岩山の下僚をも含めて一つのグループとした。これを勸業寮・勸農局グループと呼ぶ。なお、岩倉使節団そのものが内務省期における勸農政策の展開に与えた影響については、友田（1995：40-54；1996：40-52；1997：37-49）で詳しく検討している。第二はウィーン万国博覧会関係者のグループ、そして第三は、いわゆる「ドイツ・コネクション」のグループである。前田正名は三つのグループのいずれにも含めることができないので、別個にあつた。以下、この三つのグループについて、順に検討を加えていこう。なお、本稿の対象とする時期においては、言うまでもなく出身藩閥との関係が重要である。例えば、岩山敬義やその下僚であった奥 青輔などの活動は、薩摩閥との関係を抜きに語れない。しかし、藩閥に焦点をあてて農政官僚の問題を論じるには、また別の論考を用意しなければならない。そのために、本稿では敢えて藩閥の問題には立ち入らなかった。

II. 岩倉使節団関係者—岩山敬義と勸業寮・勸農局の下僚たち—

第一の勸業寮・勸農局グループは、岩山敬義を除けば、やや便宜的ではあるが、さらに①勸業寮・勸農局の本局の下僚たち、池田謙蔵・織田完之・鳴門義民などと、②下総牧羊場関係者、辻 正章・桂 弥一・新原敏三・舟木 真などの二つの小グループに区分できる。奥 青輔や後藤達三は両方のグループにまたがっているが、奥については勸業寮から農商務省に至るすべての経歴を見る

とき、本局・本省における活動こそが重要であることから、①のグループに、また後藤については、下総牧羊場における各種の活動こそが主要業績となっていることから、とりあえず②のグループに含めておく。

岩山敬義自身については、すでに拙稿（友田，1997：37-49；2002a：15-26；2002b：78-90；2006c：98-107）で詳しく検討した。岩山は、岩倉使節団理事官としての米欧回覧から明治6年（1873）8月に帰国したのち、翌明治7年（1874）1月、内務省勸業寮設置にともない勸業権助に就任、その後、明治19年（1886）に元老院議員に転ずるまでの間に、内務少書記官、内務権大書記官、農商務権大書記官、農商務省農務局長、農商務大書記官、駒場農学校長など勸農政策実務の要職を歴任した重要な農政官僚である。内務省勸業寮・勸農局時代の本局における直接の下僚が奥 青輔・池田謙蔵・織田完之らであった。

奥 青輔は、弘化3年（1846）9月、鹿児島藩に生まれ、明治7年（1874）勸業寮十等出仕として官界に入った。勸農局三等属、同御用掛をへて、同14年（1881）農商務省設立にともない同省権少書記官、さらに少書記官に進み、17年（1884）7月権大書記官に昇った。翌18年2月、水産局が設置されると初代の水産局長にあげられた。このころの農務局長が大書記官岩山敬義である。ところが水産局は、明治23年（1890）6月21日には廃止され、農務局に移管、水産課に縮小されてしまう（『農林水産省百年史』編纂委員会編，1982：253，583，586）。これについて下 啓助は「局長の奥氏が健在であつたなら同氏は閥閥もあり、敏腕でもあつたので歐洲の視察を終へて帰朝されたら水産局は大拡張をなしたであつたらふ」（下，1932：9）との感想を漏らしている。すなわち、明治19年（1886）3月13日から翌20年6月23日にかけて、谷干城農商務大臣以下6名による欧米巡回が行われ、このとき谷は「奥（青輔）氏を筆頭に語学の出来る者などを引きつれて行つた。その一行には独逸語の閑澄蔵、仏語には道家齊、英語には農芸化学士牧野健蔵即ち奥健蔵氏が居つた。ところが奥 青輔氏

は歐洲各国の漁業制度や漁業の発達程度等を視察して帰朝後大いに為すところあらんとしたに拘らず旅行中病に罹り、遂に独逸に於て長逝」(下, 1932: 9)したのである。明治20年(1887)7月31日、ベルリンの「オクタス病院」(大植編, 1971: 245)において死去、享年42歳であった。このように、奥青輔は農政官僚として岩山敬義の系譜をひき、業半ばで逝ってしまったが、存命であれば、水産分野をはじめ農政各分野で今後の活躍が期待された逸材であった。谷干城一行が残した報告書、『欧米巡回取調書』全7巻はこの欧米巡回の成果であり、それが明治20年(1887)以降の農政の展開に果たした意義を考えれば、この点はただちに首肯しうることであろう。なお、下総御料牧場(1894: 127)によれば、奥青輔は明治9年(1876)6月から明治13年(1880)1月まで、下総牧羊場に勤務しており、下総牧羊場創業期における岩山敬義の片腕的存在であった。岩山が下総牧羊場の牧羊生徒や職員を中心に結成した東洋農会では、副幹事を務めている。

次に池田謙蔵である。池田の経歴については、後述の東京談農会との関係ですでに拙稿(友田, 2006a: 1-14)で紹介したが、ここで要点のみを挙げれば以下のごとくである。池田は弘化元年(1844)11月、伊予松山藩士池田伴寛の長男として松山に生まれ、明治4年(1871)欧米を視察、このとき岩山敬義と出会った。帰国後は、愛媛県少属を経て、明治8年(1875)内務省勸業寮十一等出仕となった。翌9年フィラデルフィア万国博覧会に審査官として出張、農具等を購入して帰国し、勸農局三等属、三田育種場長、勸農局一等属、三田農具製作所長を歴任した。池田の経歴の中で、とくに重要なのは三田育種場の2代場長を勤めたことである。三田育種場は「嚮二前田正名具申大久保利通之ヲ嘉納スルニ起原セリ」(農務局, 1881: 12)とあるように、その創設は前田正名の功績であるが、池田は前田の後任場長としてその整備・拡充に尽力した。とりわけ、池田場長時代の三田育種場が東京談農会生誕の地となったことは明治期における勸農政策展開の上で重要である。東京談農会

は、前述の東洋農会や混同農会¹⁾などと合流し、やがて明治14年(1881)わが国最初の全国的農業団体である大日本農会が誕生する。池田は、同年の農商務省の創設とともに農務局一等属、翌15年には農務局御用掛准奏任となり、さらに明治17年(1884)農商務省農務局権少書記官となった。明治20年(1887)廃官となり官を辞した。著書に『道義哲学図解』上中下(道学館蔵版, 明治33年[1900]刊)がある。晩年は大日本皇道会を創設して会長となり、小柳津勝五郎の天理農法を支援した。大正11年(1922)2月死去。享年79歳であった。

織田完之もまた、岩山敬義の下僚であるが、その業績を考えると単なる農政官僚というよりも、特異な農政思想家として捉えた方が妥当であろう。織田については別稿を準備しているので、ここでは内務省期と農商務省期の織田について、彼の伝記から要点を引用するに止めておこう。天保13年(1842)三河国に生まれた織田完之は、幕末勤王運動に従事したが、維新後の「(明治)四年十一月大蔵省記録寮に入り尋て同七年内務省の創設せらるゝや其勸業寮に転し勸業頭松方正義の知遇を受け意見大に採用せらる時に勸業権助岩山敬義、翁に囑するに本朝古来の農政を考究せんことを以てす依て寮員高島千畝と共に天租より後一條天皇に至る歴朝の農政を稽査し(中略)農政垂統紀と名け以て之を進達」(織田, 1929: 26-27; 農林省, 1932: 附録16, 下線引用者)した。明治「十四年農商務省の設置せらるゝに際し其農務局に転任し専ら内外農書の蒐集に力め農事の参考書目壹千余种に及ぶ爰に於て本朝農事参考書解題五巻を著し又古来の農功事蹟を調査して日本農功伝の稿を起し次て大日本農史並びに大日本農政類編等の編輯」(同上)に従事した。織田はまた、『農政本論』『培養秘録』『土性弁』等々、佐藤信淵の数多く農書を校閲、私家版(織田氏蔵版または寅實楼蔵梓)として出版したほか、『印旛沼経緯記』や『安積疏水志』を編纂・刊行し、晩年には平将門や楠木正成夫人の顕彰にも努めた。ちなみに、東京・南品川海晏寺にある岩山敬義の顕彰碑(明治35年[1902]建碑)は、松方正義の撰ならびに篆額、織田完之の

書である

ところで、岩山敬義が勤業寮・勤農局時代に、最も力を注いだ事業は下総牧羊場の開設・経営である。下総牧羊場は、千住製絨所と合わせて、内務省期殖産興業事業のうち、「原毛生産一毛織物製造」による輸入防遏を主たる課題とした一大プロジェクトの一つであった。前述の奥 青輔とともに、その片腕となって岩山敬義を助けたのが後藤達三である。

後藤達三は、天保12年(1841)5月、幕臣の子として江戸に生まれた。早くに英・漢の二学を学び、明治元年(1868)鎮将府附を仰せ付けられ開成所出勤を命ぜられた。その後、開成所教授試補、同少助教、大学校少助教となり、大学校が廃止されるにおよび文部中助教に任ぜられ、翻訳専務を命ぜられている。さらに文部省十等出仕編輯専務、正院出仕を経て、明治7年(1874)内務省勤業寮十等出仕となり、下総牧羊場の開業に際しては同場在勤を命ぜられた。この間の業績に、『訓蒙窮理問答』全6巻(明治5年[1872]刊)などがある。内務省に転じて以降は、同省勤農局、農商務省農務局において農政官僚として活躍、とくに下総牧羊場の管理・経営、東洋農会、さらには大日本農会の創設と運営において大きな役割を果たした。奥 青輔と後藤の「二君は共に本邦の牧畜事業上に最有功の人なるのみならず本邦の農会組織上に最有功の人たり」(大日本農会、1892:39)と評価される所以である。初期の『大日本農会報告』には多くの論考を寄せており、また『斯氏農業問答』全3巻(明治8年[1875]刊)は農政官僚時代の代表的業績である。明治25年(1892)1月死去。享年52歳であった。

岩山の牧畜事業指導者としての系譜を、もっともよく引き継いだ人物は、辻 正章である。辻は、明治10年(1877)1月入場以来、下総牧羊場、下総種畜場、下総御料牧場と、一貫して牧畜関係の技師という現場の技術系官僚としての道を歩んだ。このほか下総牧羊場の職員には、のちに茨城県で波東農社を起こした舟木 真、旧藩主毛利元敏が那須野が原に設立した豊浦農場の農場長心得と

なった桂 弥一、渋沢栄一が箱根仙石原に起こした耕牧舎に係わった新原敏三などがいる。また、牧羊場出身者には職員以外に牧羊生徒と呼ばれた人々がいた。彼らの多くは、出身県を中心とした府県の勤業関係官吏となった。宮城県農商課長となった飯島一景、滋賀県農商課長となった田村正寛などがその典型で、広島県農学校助教論となった野坂慶之助、石川県農業講習所掛員となった松波幸三郎、山梨県農事講習所助教論となった相原竹雄など府県農業教育関係に進んだ者もいる。前述の東洋農会の中核的メンバーは彼ら牧羊生徒たちであった。

Ⅲ. ウィーン万国博覧会関係者

ウィーン万国博覧会は、1873年(明治6)5月1日から11月1日まで、ドナウ河畔プラターを会場として開催された。欧米を中心に23か国が参加し、出品人員は4万2,000人、入場者総数は722万5,000人にも達した。明治政府はこの万国博覧会に、総額59万円弱の巨額の国費を費やして参加したのである。以下に取りあげる佐々木長淳、関沢明清、緒方道平、田中芳男は、いずれも澳国博覧会事務局の事務官であった。

内務省勤農政策展開の上で、前述の岩山敬義が耕種・牧畜関係のトップであったとすれば、佐々木長淳は養蚕・製糸関係、関沢明清は水産関係、緒方道平は山林関係、そして田中芳男は博物館・博覧会関係で、それぞれトップ、ないしはそれに匹敵する枢要な地位を占めている。従って、その下僚や関係者を見ていけば、岩山敬義の場合と同様、相当な広がりを考えることができるが、ここではそれらには触れない。また、彼らのウィーン万国博覧会参加以前の経歴については、本誌第104号の拙稿(友田、2007:13-26)で取り上げたので、ここでは省略する。

まず、佐々木長淳である。澳国博覧会一級事務官として博覧会事務に従事した佐々木長淳は、帰国後、勤業寮七等出となり、同六等出仕を経て、イタリア・ミラノ養蚕製糸万国博覧会および米国フィラデルフィア万国博覧会へ出張、新町紡績所

長、内務少書記官、勸農局試験場長（内藤新宿試験場長）、勸農局製造課長などを歴任した。明治12年（1879）内藤新宿試験場は宮内省に移管され、佐々木自身も同年4月青山御所養蚕御用掛を仰せ付けられ、翌5月宮内少書記官、四谷勸農試験掛、植物御苑掛を命ぜられることになった。明治37年（1904）家督を長男忠次郎に譲り引退、大正5年（1916）1月25日死去した。享年87歳であった。

佐々木の業績は多岐にわたるが、とくに重要と考えられるのは、実現した事業としては新町紡績所（屑糸紡績）であり、結局構想段階で終わったのは「蚕事学校」（蚕業学校）である²⁾。いずれもウィーン万国博覧会への参加と、その後のスイス・イタリアで行った視察・調査無しには考えられないものである。ちなみに、「蚕事学校」構想は後年、蚕業講習所（のちの東京高等蚕糸学校、現東京農工大学）として実現した。

次に関沢明清である。佐々木長淳と同じく、澳國博覧会一級事務官として博覧会事務に従事した関沢明清は、帰国後、勸業寮六等出仕、米國博覧会事務官、勸農局御用掛准委任、農商務省御用掛准委任、農商務少書記官、水産局次長心得、農商務少技長、農商務技師などを歴任した。明治30年（1897）1月9日に死去したが、このとき『大日本水産会報』に掲載された訃報欄では、「米國費府（フィラデルフィア）開設せる万国博覧会に事務官として渡航するや養魚製造及漁業の状況を調査し帰朝の後ち人工孵化を実施す明治十五年大日本水産会の創立に際しては大に其挙を翼賛し爾來同会幹事の任に膺り二十一年水産伝習所の創立せるゝや推されて所長となり数多の生徒を養成し地方水産業に裨益を与へたり退官後は遠洋漁業の不振を嘆し居を千葉県館山町に移し大島沖に捕鯨業を始め模範を他に示せり」（大日本水産会、1897a: 50、括弧内は引用者）と、その業績の全貌を簡潔に伝えている。なお、田中芳男はフィラデルフィア万博からの帰路、「米國二於テ関沢明清ト共ニ養魚法ヲ研シ我邦二於ケル鮭鱒人工孵卵ノ開源」（小泉、1914: 24）となったという。

田中芳男の業績については、まとまった伝記的

研究・資料集として小泉（1914）、村沢（1978）、みやじま（1983）、田中（2000）をはじめ、数多くの研究があるので、ここであえて詳述することはしないが、田中と上述の関沢明清、さらに岩山敬義の3人が、それぞれ駒場農学校の校長、ないしそれに相当する職（田中芳男は第六課長・農学課長）に就いていることは注目される。

岩倉使節団理事官としての岩山敬義の『理事功程』中に収録されている「英国サイレンシストル農学校大意」と「獣医学校生徒規則及法度」については、すでに拙稿（友田、1997: 42-44）で紹介したことがあるが、「サイレンシストル農学校」は、実証的には明らかにされていないにせよ、駒場農学校のモデルであったとされている³⁾。また、岩山敬義の小伝は、明治8年（1875）6月帰国後「東京内藤新宿なる勸農局試験場の事を幹し尚農学者を養成せんか為に農学校を設立せんことを首唱す其結果は農事修学場（後の駒場農学校）」（友田、2006c: 105）となったと述べており、現在のところこれを裏付ける資料は発見できていないが注目に値する記述である。

明治8年（1875）9月、勸業寮に学校・農業博物館・分析を担当する第六課が置かれた。このとき、田中芳男が課長となり、同年12月には「農学校設立生徒教育教師就用順序」に関する意見を勸業寮としてまとめ、内務卿に上申した。その「立案者の署名は無いが、多分第六課の課長であつた田中芳男の筆になつたもの」（安藤、1946: 11）と言われている。

したがって、駒場農学校は「英国サイレンシストル農学校」をモデルに岩山敬義が発案し、田中芳男が第六課長・農学課長として創設の準備にあたり、さらに明治10年（1877）8月関沢明清が初代校長に就任して、草創期における農学校の整備に努めたと言えよう。関沢は明治18年（1885）3月まで約7年半の長きにわたって、兼官ではあるが、同校校長を勤めた。関沢が兼官を免ぜられた後は、岩山敬義が駒場農学校長を兼任するが、翌19年同校は東京山林学校と合併して東京農林学校と変わり、校長も前田献吉と交代した。

第二グループの最後に緒方道平を挙げておく⁴⁾。緒方は帰国後の明治8年(1875)2月太政官九等出仕、次いで8月内務省地理寮九等出仕、山林課勤務となり、これを振り出しに地理局二等属、山林局一等属、第一大林区長と山林行政に携わったが、同13年(1880)山林局を去り太政官一等属に任ぜられた。翌14年には太政官統計院一等属、さらに同御用掛となったが、明治18年(1885)官制改革による同院廃止とともに非職となった。一時福岡大林区署長を命ぜられたが、間もなく山形県書記官に任命され、のち同県参事官を経て、福岡県書記官に転任した。退官後は福岡県農工銀行取締役頭取に挙げられ、博多商業会議所特別議員なども勤めた。大正14年(1925)7月23日逝去。緒方が山林行政・事務に携わった期間は短い、その時期は、内務省地理寮(のち地理局)によって山林行政が本格的に開始されたばかりの、まさに近代林政草創期であった。その中で緒方道平は後述の松野 礪と並んで、近代的な林学知識を有する数少ない専門家の一人であり、その果たした役割は大きなものであった。明治11年(1878)4月から内務省地理局鑄^{せん}として発行された『山林叢書』に寄稿し、同14年設立の林学協会では幹事を勤め、機関誌『林学協会集誌』には論説や翻訳を発表、毎月の通常会でも演述している。また、のちに発展的に解消して大日本山林会となる林学共会の発足当時、松野 礪や片山直人とともに4人の発起人の一人であった。

IV. 「ドイツコネクション」その他

第三のグループは、いわゆる「ドイツコネクション」⁵⁾のグループである。井上省三⁶⁾は、帰国後、明治9年(1876)1月内務省勸業寮雇を申し付けられた。大久保内務卿から提出されていた羅紗製絨所建設の議が同年3月允許されたため、5月製絨機械の注文・工師雇い入れのため再びドイツに派遣され、翌10年12月帰国、羅紗製絨所の創業事務に携わった。明治12年(1879)9月、内務省御用掛・千住製絨所長を申し付けられ、同14年には農商務省御用掛、さらに19年(1886)農商務少技

長となったが、同年12月14日肺患のため死去した。享年42歳。このように、井上省三の活躍期間は短かったが、帰国後のすべての時間は千住製絨所の創設・整備・拡充に充てられ、その功績は高く評価されている。

次に松野 礪は、帰国後、明治8年(1875)8月内務省地理寮雇となり、地理局御用掛を経て、明治14年(1881)4月農商務省創設と共に同省御用掛となり、その後山林局学務課長、農商務権少書記官、東京山林学校校長、東京農林学校教授、帝国大学農科大学教授、長野・東京大林区署長、農商務技師、山林局林業試験場長、山林技師などを歴任した。とくに東京山林学校の創設に尽力し、林業教育に果たした役割は大きく評価されており、また緒方道平の項でも述べた林学共会の結成、およびそれを大日本山林会に発展させるにあたって大きな功績を遺した。

ところでこの大日本山林会の創立委員長であり、また同会の初代幹事長であったのが、青木周蔵と並ぶ「ドイツ・コネクション」の一方の旗頭、品川弥二郎である。周知のように品川は、ドイツから帰国後、内務大丞、内務大書記官、内務省地理局長、内務少輔、勸農局長、山林局長、農商務少輔、農商務大輔などを歴任し、殖産興業政策全般の推進にあたった⁷⁾。また、大日本山林会とあわせて、大日本農会・大日本水産会の、いわゆる「三会」の幹事長を務めており、さらに独逸学協会を結成して委員長となったことも重要である。この独逸学協会には、農林水産業に関連しては井上省三、桂 二郎(農商務御用掛、桂太郎の実弟)、志賀泰山(林業)、松原新之助(水産)、奥 青輔、パウエル・マイエット、松方正義、村田 保(水産)らが本会員・荣誉会員として名前を連ねており(獨協学園百年史編纂室編、1979a: 364-373)、さらに明治16年(1883)の名簿には緒方道平、関 澄蔵(農商務属)、中村弥六(林業)、松野 礪、岩山敬義らが加わっている(獨協学園百年史編纂室編、1979b: 359-374)。

最後にどのグループにも属していない前田正名についてであるが、帰国後の明治10年(1877)3

月内務省御用掛・勸農局事務取扱となり、さらに同年中に仏国博覧会事務取扱、三田培養地掛、仏国博覧会事務官、三田育種場長を申し付けられ、再びフランスに出発した。翌11年仏国博覧会事務官長、12年帰国後は大蔵省御用掛、内国勸業博覧会御用掛、農商務大書記官などを歴任し、いったん非職となった後、山梨県知事、農商務省工務局長、農務局長、東京農林学校校長、農商務次官などを歴任した。次官退任後は、貴族院勸撰議員となり、大日本農会幹事長、全国農事会幹事長などとして地方産業振興運動を展開した。大正10年(1921)8月11日死去、享年72歳であった。『興業意見』の編纂、農商工調査、全国農事会運動など地方産業振興運動、町村是運動などについては、祖田(1973)をはじめ、数多くの研究があるので、ここでは一切触れないが、内務省勸農局時代の業績としては、「嚮二前田正名具申大久保利通之ヲ嘉納スルニ起原」した三田育種場の創設、および仏国博覧会への日本の参加と、その運営に尽力したことが注目される。後者については、例えばこれを直接の契機にわが国最初の共進会が開催されることになり⁸⁾、またこのとき「事務官二名ヲシテ事務ノ余暇ヲ謀リ仏国農商務省ニ就キ書記官某ニ依リ省務ノ概略ヲ質問筆記」(仏国博覧会事務局編、1998:7)させた『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書』の「附録第二 仏蘭西農商務省職制一斑並費用決算表」は、その後展開される農商務省農政との関連で、重要な意味をもったと考えることができる。

V. おわりに

「I. はじめに」で見たように、岩倉使節団が日本農業の発展のために必要であると考えた勸農諸施設は、具体的には農政担当機関の整備、勸農会社(農業団体・農会)の結成、農学校(農業教育機関)や農業試験場の創設、農業博覧会(博覧会・共進会)の開催などであった。これらの諸施設は、農政担当機関については、まずは内務省勸業寮、のち勸農局として、農業団体についても、東洋農会や東京談農会など、そして大日本農会として、また

林業関係では林学協会や山林学共会、そして大日本山林会として、さらに水産関係では大日本水産会として、農業教育機関については駒場農学校や東京山林学校として、養蚕関係ではかなり遅れるが蚕業講習所として、農業試験場については明治9年(1876)9月以降における内藤新宿試験場の一般勸農事務からの独立、明治10年(1877)における三田育種場の開場、やや特殊ではあるが三田農具製作所や下総牧羊場として、農業博覧会については明治12年(1879)の製茶共進会・生糸繭共進会として、あるいは内国勸業博覧会⁹⁾として、いずれも実現されていくことになった。

そして、その実現の過程で中心的な役割を果たしたのは、上に見たように岩倉使節団関係者であり、ウィーン万国博覧会関係者であり、あるいはこれらを契機として大久保利通を頂点とする人的ネットワークへと結びついていく一連の人々であった。表1は明治8年(1875)における内務省勸業寮、明治10年(1877)における内務省勸農局、および明治14年(1881)における農商務省農務局を中心に、本稿に登場してきた人物の地位を一覧したものであるが、これを見るだけでも、彼らが内務省勸業寮や勸農局、また農商務省農務局において農政実務の展開上、枢要な地位を占めていたことが看取できる。

内務省勸業寮は、岩山敬義が岩倉使節団理事官として行った調査等に基づいてその職制等が構想され、岩山を筆頭に、下僚である奥 青輔や池田謙蔵らによって整備・拡充された。東洋農会は岩山敬義、東京談農会は池田謙蔵らの首唱によって設立され、やがて両者は合流して大日本農会が結成される。駒場農学校は岩山敬義が発案し、田中芳男が創設準備に尽力し、関沢明清が初代校長を勤めた。蚕業講習所は佐々木長淳が早くに「蚕事学校」という形でその構想を抱いていたが、実現はかなりのちになる。内藤新宿試験場は明治9年(1876)9月以降、武田昌次や佐々木長淳が整備に努めた。明治10年(1877)には、前田正名によって三田育種場が創設され、池田謙蔵がそれを引き継いでその発展に貢献する。下総牧羊場や三田農

表 1 内務省勸業寮・同省勸農局・農商務省農務局の農政官僚

明治 8 年 (1875)		明治 10 年 (1877)		明治 14 年 (1881)	
内務卿参議	大久保利通	内務卿参議	大久保利通	農商務卿 少輔	河野 敏謙 品川弥二郎
			[内局]		[書記局]
		大書記官	品川弥二郎	少書記官	山高 信離
				権少書記官	奥 青輔
	[勸業寮]		[勸農局]		[農務局]
頭		長	松方 正義	長 大書記官	田中 芳男
権頭	河瀬 秀治	少書記官	岩山 敬義	権大書記官	岩山 敬義
助			橋本 正人	少書記官	穴戸 昌
四等出仕	大鳥 圭介		佐々木長淳	御用掛准奏任	関沢 明清
五等出仕	田中 芳男	一等属	速水 堅曹		和田維四郎
権助	岩山 敬義		門馬 崇経		松原新之助
六等出仕	山高 信離	三等属	高島 千畝	一等属	服部五十次
	塩田 真		山中 福永		池田 謙蔵
	関沢 明清		岡 毅		南部 義壽
七等出仕	佐々木長淳		山田 令行		片山 遠平
	富田 冬三		池田 謙蔵		岡 毅
	青山 純		岡野 朝治	二等属	半井 榮
	鈴木 利亨		平野 榮	三等属	垣田 弥
	武田 昌次		大槻 吉直		後藤 達三
	橋本 正人		奥 青輔		安岡 百樹
	杉山 一成	五等属	鳴門 義民		波多野尹政
大属	尾高 悖忠		織田 完之	四等属	織田 完之
	服部五十二		後藤 達三		鳴門 義民
	門馬 崇経		舟木 真	七等属	辻 正章
	川村 清輔	御用掛准奏任	人見 寧	御用掛准判任	桂 二郎
	大森 惟中		前田 正名		[商務局]
九等出仕	速水 堅曹		関沢 明清	長 大書記官	河瀬 秀治
中属	鳴門 義民	[勸商局]		少書記官	鈴木 利亨
	織田 完之	長 大書記官	河瀬 秀治		富田 冬三
十等出仕	後藤 達三	少書記官	富田 冬三		[工務局]
	奥 青輔	権少書記官	鈴木 利亨	御用掛准奏任	井上 省三
十一等出仕	池田 謙蔵	[地理局]			[山林局]
十二等出仕	舟木 真	二等属	緒方 道平	御用掛准奏任	松野 礪
		御用掛准判任	松野 礪		[博物館]
		[博物館]		少書記官	山高 信離
		権大書記官	田中 芳男		[太政官会計部]
		[内国勸業博覧会事務局]		一等属	緒方 道平
		事務取扱御用掛	山高 信離		[宮内省]
				御用掛	佐々木長淳

(出所) 各年の『官員録』より作成。

(備考) 1) 明治 8 年の河瀬秀治は内務大丞、田中芳男は内務省五等出仕が本務、明治 10 年の松方正義は大蔵大輔兼地租改正局三等出仕。

2) 明治 8 年については大属まで、明治 10 年と 14 年については三等属までについては全員を掲載したが、実線以下についてはとくに本稿の主題に関係する人物のみ掲載した。

具製作所も試験場的な要素を有していたが、開設に当たった中心人物は、それぞれ岩山敬義であり、池田謙蔵であった。また明治12年(1879)の共進会は、すでに岩倉使節団の『理事功程』や『澳國博覧会報告書』でフランスのモデルの紹介が行われていたが、前田正名の尽力によって参加した仏国万国博覧会が開催の大きな契機となり、松方正義が先頭に立って実現されたものであり、本稿ではほとんど触れなかったが、明治10年(1877)の第一回内国勸業博覧会は田中芳男が事務局補、山高信離が事務取扱御用掛となって、その開催に当たり、また田中や池田謙蔵などが審査官を勤めている。

ところで、内務省期における殖産興業の大きな課題は、輸出振興と輸入防遏であったが、輸出振興では富岡製糸場と並んで新町紡績所に、また輸入防遏では下総牧羊場と千住製絨所に大きな役割が期待された。それぞれの期待された役割が十全に果たされたか否かはここでは別問題として、新町紡績所の創設を提唱し、それを実現させた最大の功労者は佐々木長淳であり、また下総牧羊場は岩山敬義、千住製絨所は井上省三がその創設ならびに運営において中心的役割を果たした。

殖産興業政策全体の中でも、当該時期に行われた勸農政策に対する評価は高いとは言えない。むしろ、官営主導・欧米直輸入的で、従ってまた日本農業の現状とは乖離したもので、結局は挫折・失敗し、やがて大久保利通の死後、いわゆる松方農政期から在来農事の改良という方向へ転換しはじめるというのが、通説的な理解であろう。

しかし、これまで検討を加えてきたように、こ

のような通説には修正が必要である。たしかに、事業そのものとしては、例えば下総牧羊場に代表されるように所期の目的を果たすことなく終わったものがあるが、その下総牧羊場ですら、岩山敬義を頂点に形成された人脈は、中央の農政官僚として、府県における勸業関係の官吏として、また民間の農牧業経営者として、さらには農会という人的組織として、地域的な広がりにおいても、時間的な継承関係においても、極めて大きなものがあったのであり、この時期に培われた人脈は、その後の日本農業の展開に多大な影響を及ぼしていると言うべきである。

本稿ではほぼ農政官僚に限る形で検討を加えたが、官僚以外にまで目を広げれば、その人脈はさらに大きく拡大する。例えばウィーン万国博覧会に三級事務官心得として参加した津田 仙は、帰国後は民間にあって、『農業三事』を著し大きな注目を集め、また学農社を結成して『農業雑誌』を刊行し、さらに学農社農学校を創設して多くの人材を育成した。例えば、駒場農学校第一期生で、のちに盛岡高等農林学校や鹿児島高等農林学校の校長を勤めた玉利喜造、広島・宮城両県の勸業課長・農商課長・農学校長を務めたのち、肥料・農機具等を扱う実業家に転身し、『農事雑報』の刊行でも知られる十文字信介、『女学雑誌』や明治女学校で知られる巖本善治などは、いずれも学農社農学校の卒業生である。

官界・民間にわたって広がるこの人脈に属する人々と、その事蹟・事業について実証的に明らかにしていくことは、今後の大きな課題となるであろう。

注

- 1) 混同農会については、拙稿(2005a:134-141)を参照されたい。
- 2) 佐々木長淳と「蚕事学校」構想については、拙稿(友田, 2002d:1-16; 2005b:100-107)を参照されたい。
- 3) 駒場農学校の初代外国人教師はいずれもイギリス人であった。農学教師はカスタンズ(Custance, John D.), 化学教師はキンチ(Kinch, Edward), 獣

医学教師はマクブライド(McBride, John A.), 現業教師はベグビー(Begbie, James)であるが、ベグビーを除く3人は、いずれも来日前にサイレンセスター農学校と、同校教師その他の形で関係を有していた(飯沼, 1995:21-33)。

- 4) 緒方道平について詳しくは、拙稿(友田, 1999a:28-31)を参照されたい。
- 5) 本稿では「ドイツ・コネクション」という言葉を、

- 「ドイツから帰国した留学生は、文部省や陸軍省だけでなく、内務省、司法省、大蔵省などに活動の場を見いだす。(中略)かれらは、一定の課題意識を共有しながら、いわゆるドイツ・コネクションを形成し、(明治14年の)政変後の政治的課題に対応できるだけのエネルギーを温存していた。」(森川, 1997: 「はじめに」IV, 括弧内引用者)とする森川 潤氏の意味に従って使用している。
- 6) 井上省三については、本誌第104号の拙稿で注記した文献以外に、田村(1944: 331-340), 和田(1982: 65-69), 奥村(1985: 14-37)などがある。また、千住製絨所(1928)も参照のこと。
- 7) 品川弥二郎については、村田(1910), 奥谷(1938: 33-57; 1940)などを参照されたい。
- 8) この共進会については、拙稿(友田, 1999c: 61-68)を参照されたい。
- 9) 内国勸業博覧会については、國(2005)が詳しい。

引用・参考文献

- 安藤圓秀(1946)『農学事始め一駒場雑話』雄山閣。
- 飯沼二郎(1995)「農学栄えて農業亡ぶ一横井時敬と近代農学一」『農業研究』日本農業研究所, 第8号, 21-33。
- 大植四郎編(1971)『明治過去帳』東京美術。
- 緒方竹虎伝記刊行会(1957)『緒方竹虎年譜』緒方竹虎伝記刊行会。
- 奥谷松治(1938)『近代日本農政史論』育生社。
- 奥谷松治(1940)『品川弥二郎伝』高陽書院。
- 奥村正二(1985)『シルクロードと綿糸と織物の技術史一』築地書館。
- 織田雄次(1929)『鷹洲織田完之翁小伝』私家版。
- 宮内庁(1974)『下総御料牧場史』宮内庁。
- 國 雄行(2005)『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策—』岩田書院。
- 栗原東洋(1973)『織田完之伝』印旛沼開発史刊行会。
- 小泉三男松(1914)『田中芳男氏功績書』私家版。
- 下 啓助(1932)『明治大正水産回顧録』東京水産新聞社。
- 下総御料牧場(1894)『下総御料牧場沿革誌』下総御料牧場。
- 千住製絨所(1928)『千住製絨所五十年略史』千住製絨所。
- 祖田 修(1973)『前田正名』吉川弘文館。
- 大日本水産会(1897a)「関沢明清氏逝く」『大日本水産会報』大日本水産会事務所, 第175号, 50-51。
- 大日本水産会(1897b)「関沢明清君の伝」『大日本水産会報』大日本水産会事務所, 第177~179号, 33-38, 235-239, 316-318。
- 大日本農会(1892)「岩山, 後藤二君の卒去」『大日本農会報告』大日本農会, 第127号, 39。
- 田中義信(2000)『田中芳男十話・田中芳男経歴談』田中芳男を知る会。
- 田村榮太郎(1944)『日本の産業指導者』国民図書刊行会。
- 獨協学園百年史編纂室編(1979a)『獨協百年』獨協学園百年史編纂委員会, 第1号。
- 獨協学園百年史編纂室編(1979b)『獨協百年』獨協学園百年史編纂委員会, 第2号。
- 友田清彦(1995)「『米欧回覧実記』と日本農業」『農業史研究』農業史研究会, 第28号, 40-54。
- 友田清彦(1996)「岩倉使節理事官『理事功程』と日本農業(1)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第83号, 40-52。
- 友田清彦(1997)「岩倉使節理事官『理事功程』と日本農業(2)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第84号, 37-49。
- 友田清彦(1999a)「ウィーン万国博覧会と日本農業(上)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第88号, 25-38。
- 友田清彦(1999b)「ウィーン万国博覧会と日本農業(下)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第89号, 13-27。
- 友田清彦(1999c)「資料 明治十二年共進会報告」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第89号, 61-68。
- 友田清彦(2002a)「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場(1)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第94号, 15-26。
- 友田清彦(2002b)「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場(2)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第95号, 78-90。
- 友田清彦(2002c)「内務省勤農政策の展開と農政実務官僚」『2002年度 日本農業経済学会論文集』日本農業経済学会, 66-71。
- 友田清彦(2002d)「ウィーン万国博覧会と日本における蚕業技術教育—佐々木長淳の『蚕事学校』構想を中心に—」『技術と文明』日本産業技術史学会, 第24冊13巻1号, 1-16。
- 友田清彦(2002e)「伊地知正治の勤農構想と内務省勸業寮」『日本歴史』日本歴史学会編, 吉川弘文館, 第650号,

- 57-73。
- 友田清彦(2003a)「下総牧羊場の系譜(1)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第96号, 25-35。
- 友田清彦(2003b)「下総牧羊場の系譜(2)」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第97号, 70-81。
- 友田清彦(2005a)「混同農会に関する考察」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第100号, 134-141。
- 友田清彦(2005b)「資料 明治の蚕業指導者佐々木長淳と『蚕事学校』構想」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第101号, 100-107。
- 友田清彦(2006a)「明治初期の農業結社と大日本農会の創設(1)―東洋農会と東京談農会―」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第102号, 1-14。
- 友田清彦(2006b)「明治初期の農業結社と大日本農会の創設(2)―東洋農会と東京談農会―」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第103号, 25-44。
- 友田清彦(2006c)「資料『岩山敬義君詳伝』(『牧畜雑誌』所収)ほか」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第103号, 98-107。
- 友田清彦(2007)「内務省期における農政実務官僚のネットワーク形成」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第104号, 13-26。
- 農林省(1932)『大日本農政史(大日本農政類編)』文藝春秋社。
- 「農林水産省百年史」編纂委員会(1982)『農林水産省百年史』農林統計協会, 別巻。
- 農務局(1881)『勸農局沿革録』農務局。
- 仏国博覧会事務局編(1998)『仏蘭西巴里万国博覧会報告書 第一篇 博覧会総論』フジミ書房, 原本は明治13年(1880)刊の国立国会図書館所蔵本。
- みやじましげる(1983)『田中芳男傳―なんじゃあもんじゃあ―』田中芳男・義廉顕彰会。
- 村沢武夫(1978)『近代日本を築いた田中芳男と義廉』田中芳男義廉顕彰会。
- 村田峰次郎(1910)『品川子爵伝』大日本図書株式会社。
- 森川 潤(1997)『ドイツ文化の移植基盤』雄松堂出版。
- 和田憲夫(1982)「千住製絨所と井上省三―繊維史余滴(2)―」『化繊月報』日本化学繊維協会, 第35巻第9号, 65-69。

(受付 2007年11月14日)
(受理 2008年1月8日)

Secretarial Bureaucrats of Agricultural Policy Ministry and Agricultural Policy During the Period of the Naimusho (Home Ministry)

Kiyohiko TOMODA (Tokyo University of Agriculture)

Full-fledged expansion of agricultural policies in Japan in the modern age was started by inauguration of the Naimusho and by the setting up of an industry promotion division in this ministry. Most of the bureaucrats forming the top level of the hierarchy of secretarial bureaucrats competent to support the expansion of the agricultural policies were people directly related to the circulating tour of the Iwakura Mission carried out in the period ranging from 1871 to 1873, and the events of the World Exposition in Vienna, Austria in 1873. Major members of those governmental officials comprised Iwayama Keigi, Tanaka Yoshio, Sasaki Chojun, Ikeda Kenzo, Sekizawa Akekiyo, Maeda Masana and Inoue Seizo. It should emphatically be stated that their human-relational networks were the promoting power of agricultural policy expansion in the period of the Naimusho. The focus of this paper is on the secretarial bureaucrats of agricultural policy in the Home Ministry, and how they realized the agricultural policies.

Key words: Agricultural Policy in Meiji Era, Secretarial Bureaucrats of Agricultural Policy Ministry, Iwakura Mission, World Exposition in Vienna